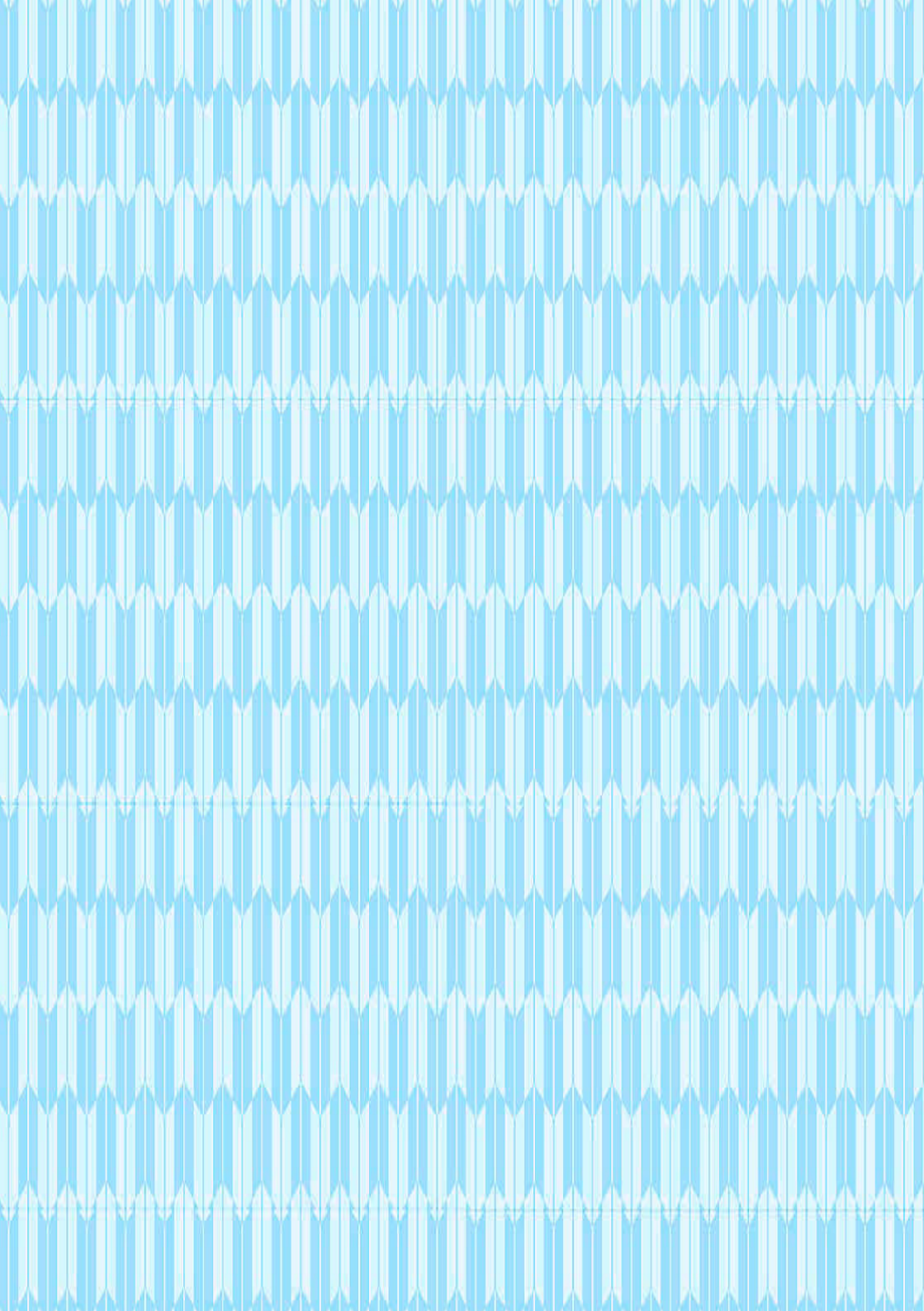


あを 8

2025



撮影：墨沱



昔
蚓
龜
蛇



羽
拔
鷄
怒
れ
り
彼
に
競
べ
ら
れ
竹
僊

あそ

八月集

坐・誹

佐藤
竹僊

廢屋の閉めきらぬ窗花吹雪

青芝や松より出づる松の影

丁寧に水に偽たるメダカの子

青龍の腹の生白梅雨あがる



夏の木になつてしまへり古祠

メダカ見てゐるうちシヤツ生乾き

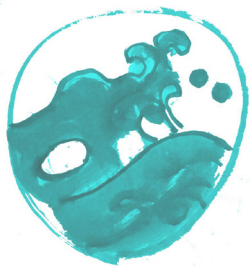
太陽盡く數刻前の熱さかな

白扇に字のあるごとし大の里

この蟲も病も名を得冷奴

霧の人乗せたるあとの霧の音

後の月この世に比丘尼橋
二ふう三みい



朝の蓮池

篠田純子

願はくは蓮の玉にて首飾らむ

蓮の風ほしいまま浴ぶ朝の池

透し見る蓮の葉脈手の血筋

浮いてきて亀吾を見つむ蓮の池

鯉の稚魚かたまり泳ぐ蓮の池

花氷はや解けだしぬ漬物屋



必ず帰る

篠田 大佳

あぢさゐやカメラに見えぬ色がある

梅雨の傘忘れしままに置いてあり

梅霖や必ず帰る傘なるよ

長嶋の雨の上がれば薄暑なり

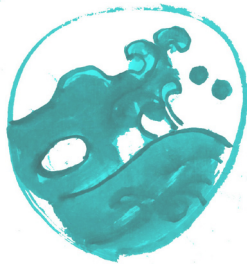
漢語なる老婆の叱言梅雨曇

溽暑地下鉄少年のへたりこむ

メロンソーダ悪口あかんもう聞いたで

夏やカフェ赤子叫ぶもジャズの内

泡盛の古酒^{ケース}祖霊と酌み交はす



雑詠

須賀敏子

梅雨晴間下校の子等はスキップで

金柑の白く小さな花咲けり

今日の空山紫陽花の花の色

蜜豆を前に静かな二人かな

ジュースよりドリンク剤に手が伸びる

空梅雨やそろそろ降ってもらいたい



梅雨

長崎桂子

桜並木や花終手入れする

電話して草花の名を聞く梅雨に

父祖の地の夏六地藏様に合掌

脇道にびつしりきれい虞美人草

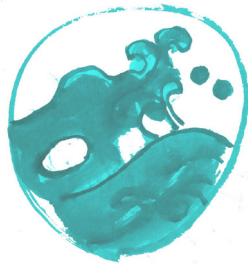
日傘さす日除ぼうしやばら香る

高原は香りみちみちカミモール

笹百合や斜面に淡いももいろゆかし

つづく梅雨を慰む琴演奏会

枇杷むいて笑顔を交し思ひ切り



六月

森
な
ほ
子

知り合ひに年下増えて独活の花

青梅の一粒地面明るうす

葉桜や媼出歩く時間帯

残雪の山風評は消え去らず

自衛隊会津若松支部に夏

揺れ騒ぐ新樹に山の動きけり

乗り換への束の間京の夏匂ふ

待ち疲れ鹿に慰み国宝展



沖繩忌

学童の歸路賑やかや枇杷小粒

右往左往雨後の雀と四十雀

梅雨ですね話題見つかる美容院

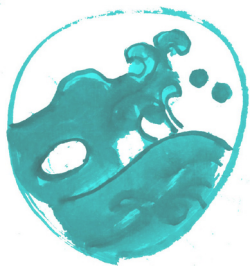
一人居の時の記念日ちぎれ雲

リモコンに遊ぶ文鳥羽抜鳥

新じゃがや根気で仕上ぐ煮転がし

朝ドラに玄孫を観る独歩の忌

反戦よ平和よ海よ沖繩忌



妹

七郎衛門吉保

賑やかな妹を送るや金銀花

賑やかに妹を送るや金銀花

妹逝きて天上世界の早苗かな

早苗田に元気な水路歡喜あり

我が身にも代田の頃のありにけり

古古古米植田のとなり休耕田

低山に霧雲の帯走り梅雨

白い腹空を捌きて夏燕



五月号作品より

赤座典子・篠田大佳・佐藤喜孝

こぶし笑く四歳までは無口な子

佐藤竹僊

子どもの成長は早く、突然性格が変わるということも起こるというのはよくわかります。五歳になった途端に言葉が増えるというのは、想像してみると、脳が発達した、環境が変わった、仲良しの友達ができた、内省を経て明るく振る舞おうと決意したなど、いろいろ思いつきます。こぶし咲くの取り合わせに、言葉にできない子どもの内省を思います。（大佳）

送電線のたわみに春のどつかりと

佐藤竹僊

この句は、句会で、皆さんに大好評でした。あの重たげな送電線に、春が乗っかっている、送電線が揺れているのではなく、春が、居座っている感じですね。難しい言葉を使わず、その状況が、素直に詠まれている。それが、皆さんの共感を得たのでしょうか。「たわみ」と「どつかり」という言葉が、しっかりと連想できました。（典子）

花冷えや禿の末は遊女とや

森なほ子

禿は、遊女に従える見習いの少女です。華やかな世界にいて、今はいとけない娘でも、将来は

遊女として過酷な環境の中に晒されるといふ先行きの不安を、花冷えの季語で表現しています。遊郭は、大河ドラマ「べらぼう」の舞台となっていて、当時の風俗に対する関心は高くなっています。かつての遊女たちは安らかになつたでしょうか。（大佳）

まんさくの花散らしたやうにちらし寿司

森なほ子

見立ての句は格は高くないかもしれないが、気にすることは無い。楽しむのが大切。まんさくの花は花らしくない花だ。野の草花でも虫を呼ばうと目いっばいけはひをして咲く。ところがまんさくは虫もとまどふ形をして咲く。その花卉がちらし寿司に散らしたやうに乗つてゐる。なかなか楽しく詠まれてゐる。他には何が乗つてゐるのだらう。「鮓」は夏の季語として扱ふ。ちらし寿司は好物。おはぎ・おにぎり・筍ごはんなどはプロが作るより、家庭で作りみんなでワイワイ言ひながら食べるのがいい。（喜孝）

鞆やあの日あの時多過ぎる

赤座典子

ぶらんこに揺れながら、昔のことを思い出している作者です。「あの日あの時」は過去の記憶で、後悔を含んでいるように思います。ぶらんこの往復運動によつて後悔が頭にこびりついて、なかなか離れてくれないイメージを持ちます。そして、ぶらんこから降りた時に、すっきりと後悔が拭い去れるような予感もします。（大佳）

春シヨール少し明るく髪の色

赤座典子

当世老若男女を問はず黒髪を、白髪を染めて楽しんでゐる。髪型ひとつ決まらずイライラして約束の時間に間に合はぬこともある。さういへば急に思ひ出したことがある。父の葬儀を何とか終へ、だうした風の吹き回しか床屋でアイパーをかけてしまった。なぜそのやうなことをしたのか今になつては謎である。掲句の典子さんは素直に春のよろこびに浸つてをられる。春を謳歌するに歳は関係ないが、「少し」といふくだりに作者が見えおもしろい。(喜孝)

祈れども野火煌々と山をのむ

秋川 泉

野焼きの火が延焼し、山火事になつてしまふなど、様々な原因で、世界各地に、自然発火が起こっています。消火までに何日も要し、多くの人々が、避難を強いられました。幾晩も燃え続ける焰を、ニュースで見ながら、本当に祈ることしか出来ませんでした。

あらゆる分野で、何が起きるか分からない世に、なつてしまいました。子供たちの将来が心配です。祈るばかりです。(典子)

夕闇に淡雪にぬれ野の佛

秋川 泉

夕闇に濡れた佛、そして淡雪に濡れた佛。この野佛を深く心にとどめられた。しばらく立ち止

まられたことだらう。布団に横になり目をつぶる。夜の闇の中で変らず立つてゐる野佛が見えてくる。と、読者を作者の世界にいざなふ作品。それは「夕闇に淡雪に」の二度の「に」の効果である。高みに読者をいざなふ効果がここにはある。「仏」でなく「佛」であることにこの野佛にたいする泉さんの感情を察することができる。（喜孝）

堅雪の壁の高さや赤信号

七郎衛門吉保

『角川俳句大歳時記 春』に、「春の暖かさで、解けかかった雪が、夜の寒さなどで、堅く凍りついた状態をいう」とある。例句として、踏みしめる雪の堅さに触れているが、作者は、高く壁となつた、堅雪を詠んでいる。雪国で見られる、壁の高さは、優に人の身長を超え、道沿いでは、人家を隠すほどである。

作者は、「赤信号」を高い位置に存在するとか、危険を知らせる働きをするとか、警告の意味で用いていると思われる。作者ならではの発想である。（典子）

桃の花一枝そろばん玉のごと

七郎衛門吉保

「見立て」とは、あるものを別のものに例へたり、置き換へて表現する手法や考へ方のことです。よく「如く俳句」ともいふ。掲句は桃の花枝を算盤に見立てた。見立てに使ふものは大方詠者の身辺にある物に例へる。掲句の「そろばん」は若者の発想の中には無いかもしれないが、わたし

は何回も肯くことができる。形状が似ているといふ発見の楽しさから始まり、カシオの電卓が拡まるまでは家の中に必ず算盤は備へてゐたものだ。見立てのおもしろさの一つに「何に」見立てたかといふ見立てた「事」や「物」にもあるやうだ。（喜孝）

風光る記事の見出しの七五調

七郎衛門吉保

七郎衛門吉保さんは世情の出来事を残さなければと俳句を作るといふ。失礼だが大方まづい。吉保さんはそんなことは恐れない。一本筋金が入つてゐる。その余得であらうか、力みが抜けた隙間に掲句が出来たやうだ。記事の見出し、キャッチフレーズほど右を向いて言つてゐるのか、左を向いて言つてゐるのか判然としない。ただ読んでもらうための言葉が並ぶ。それに騙されて読んでしまふ私もわたしが。吉保さんは見出しがニュースの内容より「七五調」だと気づきおもしろがつてゐる。きっと内容も「風光る」にふさはしいニュースだとおもへる。吉保さんはいまに人を唸らせる時事俳句を詠まれることであらう。それを見逃さぬやうアンテナの掃除をしやう。（喜孝）

春深し先代の名のクローン犬

篠田純子

おそらく、ニュースを見て作った句であると思いますが、亡くなった愛犬のクローンを作つて、同じ名前で飼育する飼い主のニュースが出てきました。春深しという季語からは、季節が巡つて、

生命が躍動する予兆を感じます。未来のことはわからないし、命を弄んでいるという批判も出るでしょう。それでも、愛するものの死を乗り越える一つの形として、作者は飼い主に寄り添っているように思います。（大佳）

花の雨 佃小橋の鰯

篠田純子

季語に凭れ、地名に寄り添ひ、そして言葉を愛し一句が詠まれてゐる。ここにあるすべての言葉を愛し信じてゐる。他者の言などこの句には不要である。わたしも昔日人の案内で佃小橋に立つたことがある。今ネットで見ると佃小橋から見える空にはビルが林立してゐる。そのやうなことは掲句は目をつぶつてゐる。これは作者の意志である。（喜孝）

旅の子は漕ぐ鞆をめいっばい

篠田大佳

旅先で、久しぶりにブランコを見かけ、昔とった杵柄で、思いきり漕いでみます。高い青空が近付き、戻るときの、スリリングな感覚も思ひ出します。その躍動感、忘れられない思ひ出となることでしょう。「めいっばい」が素敵に効いています。（典子）

墨堤にうたふ彼岸のさくらかな

篠田大佳

リハビリと称して軽運動をしに週一回迎車に乗つて出かける。二、三人が一組になってまづ好み

の飲み物を注文していただく。同席の人は決まってゐない。先日隣り合はせた男性は私より二、三歳年上であつた。手術を何度も経験なされてゐると聞く。麻酔で寝て（？）ゐた時、不思議な夢を見たといふ。きれいな流れの小川。あしもとも澄んだ水、田んぼのやうな気がした。向ふ岸には花が咲きその向かうには懐かしい顔々がニコニコと並んでゐたといふ。家に戻つて家人にその話をしたら「それ三途の川と違ふ」といはれたと話してくれた。

掲句を読んでなぜかこの話を思ひ出してしまつた。「彼岸」といふ言葉のマジックに掛かつたのだらうか。（喜孝）

まあまあの人生なりやミモザの日

須賀敏子

物事の満足度というのは塩梅が難しく、満足しすぎると飽きてしまふし、かといつて、不満が多ければ反発してしまいます。不満もあるが、楽しいこともあつたくらいが、例えば学校生活などを振り返ると、ちょうど良かったなと思えます。

作者は人生を振り返っています。ミモザの日は三月八日を女性の日として制定されたイタリアの祝日だそうです。女性として生きるのは大変だったけど、女性に感謝する日があれば、まあまあ良かったと言えるのではないかと振り返っているようです。（大佳）

佐助の花の中なる目白かな

須賀敏子

蝶や昆虫は花が好きだが、鳥も負けずに花を好む。あの大型の鴉も桜の花を抓んでゐる。特にメジロやヒヨドリが目につく。メジロといふ鳥名通り目の周りを白く縁取られてゐて目立つ。そのメジロがいまは佐助の花に埋もれていそがしい。メジロにとつては極楽である。

押し出されまた潜りこむ眼白かな

吉田 菫

(喜孝)

はや開花さむさいとはぬさくら花

長崎 桂子

奈良を訪れた作者は、早くも咲いている桜を見つけました。こんなに寒いのにもう開いている桜、咲き始めは初々しく、一段と美しいです。作者は、その美しさと逞しさに会えた、喜びから励ましを貰っています。「寒さいとはぬ」という表現に、作者は、力強さを込めています。(典子)

囃し立て草餅つくる奈良の春

長崎 桂子

奈良の草餅は有名で期間限定で売られると知った。列んで買ふものらしい。中谷堂の高速餅つきは見てゐると恐ろしくなる。餅つきの観衆でもありお客でもある人々の声も混ざり当に奈良の春である。(喜孝)



季語あれこれ 「ビール・打水・ほか」

警戒級の暑さ。暑さ凌ぎのなるかはわかりませんが、今月は少しでも涼しくと願ひ季語を選びました。暑さを凌ぐ料理はそれぞれの好みがありますが、「まあ、とりあへず」。

| | |
|-------------------|-------|
| 気に入りのグラスにそそぐビールと私 | 芝宮須磨子 |
| 地麦酒の夜のうらぎり蚩鳥賊 | 森 理和 |
| 溢れさせビール飲む夫夢の中 | 芝宮須磨子 |
| 過労死などあり得ぬ男生ビール | 篠田純子 |
| すつかりこけ顔へ夏越の黒麥酒 | 堀内 一郎 |
| 天心に月ころがしてビール抜く | 渡邊友七 |
| ミャンマーへ歩いて着きしビール飲む | 佐藤喜孝 |
| 南国のビールグラスの大ききよ | 赤座典子 |
| 信子から注いで貰ひしビールの泡 | 堀内 一郎 |
| 春の川ふじつぽ付いたビール瓶 | 篠田純子 |
| 五十年相性あはずビールの泡 | 堀内 一郎 |

| | |
|-------------------|-------|
| 缶ビール三つ潰して友帰る | 鎌倉喜久恵 |
| 郎女に植疱瘡が生ビール | 佐藤喜孝 |
| 倍働けと言つてゐた父生ビール | 篠田純子 |
| ふるさとに絆うれしくビール酌む | 芝宮須磨子 |
| 無器用に生きて器用にビール飲む | 遠藤 実 |
| 切れ味かはた喉越しか缶ビール | 木村茂登子 |
| みんなで泣いてビールの泡のほろ苦き | 堀内 一郎 |
| チェコよりのアロマホップの麦酒試飲 | 佐藤恭子 |
| 麦酒試飲ほろ酔のまま帰路のバス | 森 理和 |
| 無機質のビール工場百日紅 | 森 理和 |
| 時に吹く微風麦酒の歩をはやむ | 佐藤恭子 |
| 砂利を踏む麦酒の酔が顎にも | 佐藤恭子 |
| やはらかき泡に味あり新ビール | 須賀敏子 |
| 大国魂神社奉納薦麦酒 | 佐藤恭子 |
| 秘仏観てご馳走食べて生ビール | 篠田純子 |
| けふはビール旨いぞと云ふ日のビール | 篠田純子 |
| 試飲するビール工場春の雪 | 須賀敏子 |
| 銀盃をキンキンにして麦酒の夜 | 井上石動 |

| | |
|---------------------|--------|
| イカリワク怒り湧く度ビール飲む | 篠田純子 |
| 夕立を眺めるビール飲み乍ら | 森 直子 |
| ネクタイを緩めビールの一気飲み | 黒澤佳子 |
| 漱石ビール安兵衛燗りし酒屋にて | 篠田純子 |
| 爽やかや昼の麦酒の白き泡 | 森なほ子 |
| ビール飲んだ顔して銀座どまん中 | 佐藤恭子 |
| 軟骨のつくねにビールス貰ふ暮 | 篠田大佳 |
| 墓参り缶ビール添へ花を添へ | 大日向幸江 |
| 万緑や茶店の提灯ビール紋 | 七郎衛門吉保 |
| 殿塚の供物ビールとウヰスキー | 篠田純子 |
| 納涼船カオス隣のビールひつ掛る | 篠田純子 |
| テレビから妻の持唄缶ビール | 佐藤竹僊 |
| ハッピーアワーは道後ビールとじゃこ天と | 赤座典子 |
| 階段に腰掛けまづは缶ビール | 篠田大佳 |
| ゴーゴーガールを直視できない生麦酒 | 篠田純子 |
| キンキンに冷やしましたよ缶ビール | 篠田大佳 |
| 生ビール猫舌母娘のもんじや焼き | 篠田純子 |

打水の効果は如何ほどなのだらうかとおもふが、
視覚的には本当に涼しくなる。何処で見てゐたのか
すぐにトンボが下りてきて産卵をするのを見ると悲
しくなる。



| | |
|----------------|------|
| 箸目に打水をしてお味噌汁 | 芝 尚子 |
| 打水や留守居の犬に振るまはむ | 山莊慶子 |
| 打水をよこぎるころがまへかな | 佐藤喜孝 |
| 打水を過るまでわれ影であり | 佐藤喜孝 |

打水のバケツに浮かぶ葉くづかな

齊藤裕子

打水や江戸の香の立つ佃島

篠田純子

打水の露地涉りくる銅鑼五点

東垂未

打水が坂道を行く蛇になる

篠田純子

打水する仙台平の見えかくれ

篠田純子

打水すチカチカ交信はしまれり

佐藤竹僊

打ち水が日課隣家の爺ありき

森なほ子

打ち水を子らに頼めばびしょ濡れに

森なほ子

置いてきし打ち水日向水の日々

森なほ子

水を打つバケツ小さし店の幅

渡邊友七

金魚も見て涼しくなるもののひとつ。金魚が居なくても金魚玉に金魚藻があるだけでも涼感を呼ぶ。

金魚への朝のあいさつ今日も又

早崎泰江

秋めきて金魚の尾鰭ゆつたりと

早崎泰江

エサキンと呼ばれて金魚赤かりし

森 理和

深川を辰巳と呼べり金魚玉

後藤志づ

夜の秋小鳥と金魚ひさぐ店

竹内弘子

日向水せつせと溜める金魚のため

竹内弘子

下駄箱の金魚玉越後獅子の唄

竹内弘子

金魚鉢女にもある正念場

田中藤穂

八階の売場へ金魚昇りゆく

竹内弘子

大甕に夜店の金魚放ちけり

竹内弘子

金魚玉はなれて寄つて同母妹なし

竹内弘子

強震のありし五階の金魚玉

竹内弘子

思ひ立つ金魚の一尾矢のごとく

森 理和

長生きの金魚跳ねざま鯉に似し

早崎泰江

金魚にも夜の挨拶ライト消す

早崎泰江

宵祭金魚すばやく舵かへる

長崎桂子

きのふより水をつめたき金魚鉢

竹内弘子

小さくちさくまるめたる餌金魚釣

森 理和

金魚売バツテンボーのリフレイン

赤座典子

骨董市法外な値の金魚鉢

赤座典子

人待つや金魚一尾は淋しからむ

渡邊友七

ふるさとを語る珊瑚や金魚鉢

赤座典子

金魚沈む集中豪雨来たりけり
金魚死す水槽の藻のゆれてゐる
追ひかけて追ひかけられて金魚池
平穏な一尾となりし金魚かな
水槽の広々とせり金魚老ゆ
縁日の帰り重たき金魚二尾
手を伝ふ水は逃さず金魚鉢
金魚行く波紋の影に速さあり
月曜はいつも寂しき金魚玉
大甕を叩いて金魚の名を呼べり
運不運金魚すくひをはじまりに
俳諧にをとこの妬心金魚玉
そば処青藻に金魚泳がせて
禅寺の池の金魚の肥えてをり
金魚を繁殖させて青年恋もせず
金魚鉢晝屋さんは根津育ち
小説の結末に似て金魚玉
いつときの雨の入日や金魚玉

渡邊友七
早崎泰江
森 理和
早崎泰江
早崎泰江
森 理和
堀内 一郎
齊藤裕子
定梶じょう
竹内弘子
堀内 一郎
竹内弘子
田中藤穂
篠田純子
篠田純子
田中藤穂
竹内弘子
井上石動

アガサ・クリスティーの顔ぶれ金魚玉 竹内弘子
金魚玉ひとを隔つは隔てらる 竹内弘子
開戦日ときどき金魚よこに泳ぐ 定梶じょう
密室の金魚のひれのみどりいろ 篠田大佳
簾買ふメダカ金魚も数に入れ 大日向幸江
金魚売アルプスの水飲んでをり 亀田虎童子
極楽の極み金魚に餌が浮く 佐藤竹僊
扇子、団扇は生活の中で活き活きとしてゐたが、
いつの間にやら消えていき、いまは小型の扇風機が
売れてゐる。ただの扇風機とは違ひ冷たい風が出て
くるさうだ。

いらだつてバス待つ真昼白扇子 芝宮須磨子
扇子に一句師の面影をひらくべく 堀内 一郎
渡されし踊団扇を腰に差す 栢森定男
寝ぼけても団扇は必ず左手に 篠田大佳
抽出に夫の手跡の古扇 田中藤穂

膝団扇うそうそ時のひとり酒

愛うたがはぬ眸「湖畔」の団扇

団扇から生まるる昔ばなしかな

添寝する団扇のはたと止みにけり

房州団扇祖母の笑顔を思ひ出す

黄昏の一葦の水に団扇かな

団扇風子に送る母眼は遠く

いらだつてバス待つ真昼白扇子

何時のほど増える団扇を捨てきれず

扇子に一句師の面影をひらくべく

入り王にとんで香車や団扇風

受付に団扇の並ぶ接骨院

団扇風寝てばかりゐるおかあさん

御八つ時団扇の風を良しとして

晴れ女雨女居る丸団扇

スマホ程小さき団扇の風よろし

求めたるヴェニス扇白レース

団扇にて曲舞の所作信長忌

佐藤恭子

長崎桂子

佐藤恭子

齊藤裕子

森 理和

佐藤恭子

鎌倉喜久恵

芝宮須磨子

須賀敏子

堀内 一郎

佐藤恭子

須賀敏子

篠田純子

長崎桂子

石森理和

石森理和

森なほ子

篠田純子

洪団扇こんな所にさしはさみ

嵩の無き垂乳根団扇にて凌ぐ

絵扇のゆるりと波紋起こしけり

定梶じょう

篠田純子

森なほ子



「夏痩せ」といふ食欲の失せる酷暑の中でもいろいろと考へられた食べ物がある。

老恩師話題おもしろ夏料理

田中藤穂

夏料理薬膳として白ワイン

芝宮須磨子

一族の一人増えたる夏料理

田中藤穂

夏料理はからず祝ふバースデー

森山のりこ

白を食し翠のこりし夏れうり

佐藤喜孝

赤みずのころろ汁めく夏料理

赤座典子

夏料理に留守居の人を誘ひけり

赤座典子

窓の雨ビル三階に夏料理

森なほ子

アミューズは茶葉の天ぶら夏料理

赤座典子

コロナ後の四人の集ひ夏料理

都築繁子

行李柳遠つ淡海の大鰻

佐藤恭子

かにかくに土用の鰻食うべけり

森山のりこ

饒舌も土用鰻の味のうち

遠藤 実

信心のやうに鰻を称へけり

田中藤穂

旧木場に偲ぶ青春鰻喰ふ

阿部寒林

手にとつて迷ふてをりぬ鰻の日

斉藤裕子

まあだまだと神追つ払ひ鰻喰ふ

斉藤裕子

宝くじ売場の向かひ鰻焼く

定梶じょう

大鰻さばく手元のあやふけれ

秋川 泉

柳川に歌碑と鰻とどっこ舟

七郎衛門吉保

鰻屋の柁の俎柁の下駄

篠田純子

俎に鰻断首の傷長し

篠田純子

どぶ川の雨鰻さらへと囃す子ら

秋川 泉

秋暑しなんと鰻の自販機ぞ

篠田純子

ベートーヴェンにコーダ冷奴におかか

佐藤喜孝

魁皇が好きと言ふ母冷奴

鎌倉喜久恵

冷奴庭石すずろ夕づきぬ

渡邊友七

お節介ぐせがなほらず冷奴

田中藤穂

頭を支ふ首疲るるよ冷奴

田中藤穂

ひとつとやひとりやもめの冷奴

堀内 一郎

老の日は無風に似たり冷奴

田中藤穂

テレビでは野茂が引退冷奴

佐藤喜孝

冷奴ホークとナイフのマナーとか

遠藤 実

冷奴二級酒愛し逝きし友

遠藤 実

冷奴もう登れない岳ばかり

須賀敏子

独裁もデモクラシーも冷奴

佐藤喜孝

冷奴酒のつまみと出す女将

大日向幸江

(佐藤喜孝)

あとがき

今月の表紙

東京・上野の不忍池に咲く蓮の花です。(撮影・不寝)

俳句と着物

今月は筆者の七郎衛門吉保さんが体調を崩され休稿といふことになりました。この暑さです。ご静養くださいませ。

後書を書く

七月の十五日、このあとがきを書いてゐる。「あをやぎ通信句会」の寸感を大佳さんに送りホッとしてゐるところ。大佳さんにお手数をおかけし申し訳なく思つてゐる。台風が近づいてゐる。雨がときどき強く降る。先日の雨で目高が数匹流失してしまつた。水があふれぬやう颱風への準備をした。目高もさうだが雨と風はわたしの行動を制限する。昨日は要介護認定士が来る日。散らかし放題の一部屋を何とか坐る空間を作り疲れた。今日は用足しに出かけるつもりだつたがやめた。明日はリハビリで出かけ雨の予報。手元不如意で郵便局に行かねばとおもふが。まあ何とかなるだら

う。それにしても要介護認定のために人差し指を立てた図を見せられ何指か訊かれる。今の季節はと問はれ間違へぬやう緊張する。すこし質問の方法に一考あつてもといつもおもふ。

「前月抄」のカット、今号は手花火と西瓜。今の若者でも夏のイメージといへば老人とあまりちがはぬやうだ。縁側のある家に住んだこともないエイマなのに、縁側が描かれてゐるのがおもしろい。順調に高校生活が始まつたらしい。(喜孝)

二〇二五年七月号

発行日 七月十五日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244

印刷・製本・レイアウト 竹僊房

カット／福井美佐子・ティリエイマ

会費 一五〇〇〇円(送料共)／一年

ゆうちょ銀行(普) (店番 018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)

